

藤浪之屋

藤浪之屋は、元々は神職のための詰め所です。春日大社の北詰の回廊にある暗い部屋には何十個もの釣燈籠に火が点され、現在ここでは、毎年春日大社で行われる万燈籠が再現されています。

江戸時代（1603～1867）までは、春日大社では毎夜、約三千基もの石燈籠や青銅製の釣燈籠に火が点されていました。燈籠には毎夜、280 リットルの油を使ったため多額の費用がかかりましたが、当時の徳川幕府からの寄進によって賄われていました。

現在では、春日大社の全約三千基の燈籠が同時にともされるのは、2 月と 8 月の年 2 回だけです。これらのお祭りに参加し、暗がりの中で揺らめく燈籠の光が生み出す神秘的な美しさを見るために、日本全国から人々が集まってきます。

藤浪之屋では数十の青銅製の灯籠が灯されているので、訪れた人たちは一年中いつでも万燈籠のお祭りの雰囲気味わえます。